



雨水利用を進める全国市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL: 03-3611-0573

FAX: 03-3611-0574

H.P: <http://www.rain-water.org/>

総会報告 1

会の名前を「雨水市民の会」へ変更します

自然を「利用する」から自然と「融和して生きる」運動の一環として

6月25日に墨田区区役所で第9回総会が開かれました。辰濃会長から会の名称を変更することについて提案があり、「雨水市民の会」とすることで、決定しました。

これは、以前から幹事会で声があがっていたもので、「あまみずの会」、「雨と暮らす会」、「雨と生きる会」など様々な名前が提案されていました。総

会出席者から意見をいただき、最終的には「雨水市民の会」に決定しました。ただし、「雨水利用を進める全国市民の会」と同一の団体であることがわかるように当分の間はかっこ書きで「雨水利用を進める全国市民の会」を併記することとなりました。

(総会資料17ページもご参照ください。)

目次

総会報告2：新しいプロジェクトの紹介	2 3
千年の木は千年持たせたい(東本願寺と環境を考える市民PT報告)	3
・募集：とっておきの雨のお話	4
・お願い：会報「あまみず」のインターネット購読にご協力を	
・チャレンジ：大江戸打ち水大作戦	
「風」コーナー	5
・天災に雨水の備えを	
・村瀬事務局長、ラジオ日曜喫茶に出演	
酸性雨調査研究会からの手紙	6
「MONSOON水と生きるアジア」市原基写真展を見て	6

会の名前について

会長 辰濃和男

私たちは、長い間「雨水利用を進める全国市民の会」という名称に親しんできました。対外的にも、すでにこの名前が認知されていることはいまでもありませんが、そろそろ、脱皮のときではないでしょうか。

私自身は、雨水の運動を進めるなかで、「利用」という言葉に抵抗を感じるようになりました。私たちの命は海水から生まれました。水は私たち命あるものの大なる母です。水があってこそ、私たちの命があります。大自然の中核にある「大なる母」のことを考えるとき、「利用する」という言葉はふさわしくないのではないか。水をたんなるモノと考えれば「利用」もいいでしょう。しかし、雨水に対するとき、もっと敬虔な態度が必要なのではないか。私自身はそう思うようになりました。

自然破壊を進めてきた近代技術文明の根底には、大地や森や水をモノと考え、人間が利用しうるものは、人間の

利益のためにとことん利用するという思想があります。しかし、これからの私たちは、地球という生命体と融和して生きること、つまり自然破壊よりも自然融和を第一に考えて運動を進めねばならないと確信しています。

私たちの運動は、「雨水を利用する・ためる・しみこませる」ということにとどまらず、雨と親しむ、雨をめづる、雨の文化をゆたかにする、という意味合いを持っています。それは会の発足当時からあった思想ですが、運動を進めるにつれて、「雨の文化」を考える比率がますます強くなりました。その意味でも「利用」という言葉はふさわしくないと思います。

付け加えれば、いまの会の名前は長すぎるという批判がありますが、これももっともな批判です。

今年度の総会で、会の性格をもっと的確に表した、もっとすっきりとした会名を、と提案したのは以上の理由です。



会の名前変更にもなって、会報「あまみず」のロゴのデザインを募集します。9月15日まで事務局へ郵送してください。すてきなデザインをお待ちしています。(広報部会)



2003年度 総会が開催されました

総会報告 2

今回第9回総会では、出席者は33名、委任状が86名でした。部会における前年度の事業内容と今年度の方針が報告され、承認されました。会の名称変更につ

いては前述したとおりです。

当日欠席された方には、総会資料を同封しています。

今年度の活動予定

—新しいプロジェクトの紹介—

昨年度あたりから新しいプロジェクトが続々と発足し、活動を進めています。ここで簡単にご紹介します。



1 雨水利用技術者講習会 プロジェクト

前年度は世界水フォーラムにおいて、ドイツの雨水利用・水の有効利用技術者集団 f b r の理事、クラウス氏に講演をしていただき、交流を深めました。

今年度は地球環境基金の助成金を利用して、再度、クラウス氏を招き、具体的なアドバイスをもらいながら、よりよい雨水利用の方法を追求していきます。日本での適切な雨水利用の普及を図りながら、日本とドイツの雨水利用技術の交流、ノウハウの共有を目指します。

そのことがやがてアジア・アフリカ諸国への雨水利用の広がりになっていく、と思われま



2 保水型下水道プロジェクト

前年度は、2回にわたって雨水利用と下水道料金の問題について講演会を実施しました。3月の水フォーラムでは、その講演録と市民の会からの政策提言をCDにまとめ、配付、販売しました。今年度は、雨水の貯留浸透が都市の雨水処理にどのように貢献できるのかを探り、料金形態も見直しながら、今後の下水道のあり方を提案していきたいと考えています。



3 手作り雨水タンクプロジェクト

誰でも手軽にできる、ポリバケツをつかった雨水タンクの講習会です。雨水利用を広めるために、すみだ祭り、他区の消費者展、生協祭などにも出向いて、雨水利用の普及とタンクの販売を促進します。

各プロジェクトは会員であればどなたでも参加できます。事務局へお問い合わせください。



4 あまみず公開セミナー プロジェクト

前年度、「雨の事典」公開講座として、5回の講座を実施しましたが、今年は「雨のエンジョイプロジェクト」と合体して、「あまみず公開セミナー」として行います。

すでに6月22日には第1回のフィールドワーク「森の魔術師・変形菌を探そう」を高尾山で実施済みです。2回目からはまだ未定ですが、「源氏物語と気象」や「モンスーンのしくみについて」などの講演会を催す予定です。

また、身近な雨について会員の皆さんに語っていただく「雨のショート・ショート」を、会報でご紹介していく企画も行います（記事を募集しています）。



5 東本願寺と環境を考える 市民プロジェクト

東本願寺では、親鸞上人750年遠忌記念事業の一環として、今後10年がかりで東本願寺御影堂と阿弥陀堂の屋根修復工事が行われます。その際、雨水利用を考えたいという相談が若いお坊さん達からありました。実現すれば東京の国技館、京都の東本願寺と、雨水利用のシンボリック役割を果たすでしょう。

9月6日（土）に「東本願寺と環境を考える市民プロジェクトの集い」第1回が開かれます。



6 雨と文芸チーム

「日本文化は湿気の上になりたっている」とは、『雨の事典』を作る中で出会ったことばでした。それを文芸の面からじっくり探って、データベースに残そう、というチームです。古代からの文学、和歌や俳句、川柳、エッセイ。演歌、Jポップ、民謡などの歌。絵画、映画、ときには仏教や哲学まで幅を広げて、「雨と日本人のこころ」の美しい森を訪ねます。去る6月12日に、設立メンバーのうち8人が出席して発足したばかり。当日は「日本各地の雨乞いの祝詞を調べたい」などの意見も出ました。皆さまのご参加を期待しています。



7 雨水探検隊

学校と連携して稲作りをしたり、墨田の子供たちと墨田の雨水利用の施設を見学したりしました。今年度は、エコクラブに加入して、活動を続けていきます。



8 雨水利用国際協力・支援 (バングラデシュ・スカイウォーター) プロジェクト

井戸水の砒素汚染からバングラデシュの人たちを救おうとして始まった活動ですが、これまで、2000年3月、2002年8～9月、2003年1月と3回、現地へ行き、雨水利用のプラント建設まで進みました。この様子は、今年の3月16日にテレビ朝日の「宇宙船地球号」で「空から雨が降ってきた」というタイトルで放映されました。

バングラデシュの建物には、雨どいがありません。今年度は、現地の人たちが現地の材料で雨水利用施設を建設できるように、竹を使った雨どいの作成をするため、7月20日に出発しました。



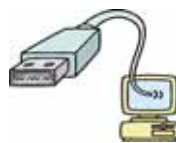
9 BIFURUプロジェクト * (「BI」は 朝鮮語で「雨」、 「FURU」は日本語の「降る」の意味)

2001年5月、墨田区の環境ふれあい館に「雨水資料館」がオープンして2年2ヶ月が経ちました。また、



10 年報部会

昨年度は、バングラデシュなどの海外活動報告や市民の会の活動年表については、まとめが終わっています。今年度は、昨年度の『雨の事典公開講座』などをまとめ、取り込んでいく予定です。



11 情報部会

昨年度は、雨水利用データベースの文献編を完成しました。国内810件、海外300件です。今後、ホームページの充実を図るとともに、データベースのホームページでの公開やCD販売を進めていきます。



12 広報部会

会報「あまみず」をホームページに掲載していきます。



千年の木は千年持たせたい

東本願寺と環境を考える市民プロジェクト報告

6月14日、東本願寺にて人見、高橋（朝子）、柴、宮大工の大森さん、その他、関西下水文化研究会、京都雨水の会のメンバーと、東本願寺の若い僧侶たち総勢15名が集まりました。

まず、東本願寺の御影堂の屋根裏を案内してもらいました（6ページの写真参照）。大人が3人かかえほどの巨木も組み合わされた、屋根裏のジャングルジムの驚き。僧侶の蓮容さんの「千年かかって育った木は、千年持たせたい」との説明に感激しました。

雨が激しく降ってきた中で考えたのが功を奏し(?)、まず御影堂の改修工事にかける「仮屋根」8000㎡を利用して実験しようという案がでました。雨水を工事用水、トイレ、そして、30万枚もの大きな屋根瓦の洗浄用水などに使っては、というアイデアも、(雨の中で)泉のように湧いてきました。この日の夜の交流会は、若い僧侶たちと、盛り上りました。

人見から、「親鸞おわせば、もうさるや、こころにありては、南無阿弥陀仏、いのちにあるては、南無雨陀仏」との掛詞。この意味も良く伝わりました。「そ

んなことは、わたしや、しんらん」(?)とのオチ。

7月7日、京都の市民グループ(京都グリーンファンズが中心)が東本願寺との交流会を行いました。東京からは、人見、酒井が参加しました。京都グループとの顔合わせも出来ました。

現在、「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」(仮称)として動き始めました。これは、単に、雨水利用という領域をこえて、物質循環のかなめとしての「雨」を切り口にした、京都の水文化再生運動という壮大な夢へと向かいつつあります。

9月6日(土)には、東本願寺の僧侶たちとの懇談会を、そして、11月には、市民プロジェクトの第1回シンポジウムをやろうというプランも始まりました。

東京の国技館、京都駅前の世界最大の木造建築、東本願寺から発信する「雨のシグナル」の実現にみなさん、力と知恵を貸してください。(人見達雄)





教えてください！ とっておきの雨のお話



「もしもあの時、雨が降っていなかったら、私の人生変わっていたかも・・・」

「もう一度見てみたい、あの雨の風景」

皆さんの身の回りに雨にまつわる思い出、お話がいっぱいあるはず。そんな話題を

文字にしてみませんか。

「あまみず公開セミナー」プロジェクトチームでは、新企画として、雨にまつわるお話を募集します。フィクション、ノンフィクション、紀行文等ジャンルはなんでも結構です。あなたの雨についての思いをお寄せください。

【例えばこんなこと】

- ❖もしもあの時雨だったら、あるいは雨じゃなかったら・・・
 - ❖雨でガッカリした思い出、雨で喜んだ思い出。
 - ❖雨が降ると思い出す、私だけの大切な思い出。
 - ❖雨の似合う風景、デートにお薦め雨のスポット、ベストスリー。
 - ❖雨のエッセイ、雨の童話、などなど・・・
- 字 数：原稿用紙1～2枚（800字を上限）
 - 締 切 り：なし（随時受付）
 - 応募方法：お名前、ご連絡先を明記の上、事務局まで郵送またはファクスをお送りください。なお、発表にあたってペンネームを使用する場合は『ペンネームで発表希望』と明記ください。
 - 発 表：会報で随時発表



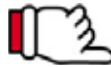
会報「あまみず」のインターネット購読にご協力を

広報部会では、①会の内外を問わず、活動をタイムリーにPRし、雨水利用のネットワークが広がられる、②会報がカラー刷りで見易くなる、③会報の発送費を節約できる、などの理由から、雨水市民の会のホームページに会報を掲載することを、情報部会とともに検討してきました。

今後、パソコンソフトを購入し、学習会を重ねていく予定です。次号あたりから、ホームページからのアクセスで会報を印刷できるように取り組んでいます。

■インターネット購読の手続き

同封の回答用紙にインターネット購読か、印刷物で郵送か記入し、事務局へFAX又は郵送願います



インターネット購読希望者：

- ・最新号の会報をホームページからダウンロードすることをEメールでお知らせする。
- ・会報以外にも、市民の会や関連団体の企画についてEメールでお知らせする。



郵送希望者：従来どおり印刷物で郵送する。



大江戸「打ち水」大作戦に参加しませんか - みんなの手で灼熱の東京の気温を2度下げる

8月25日(月)
正午決行 !!

「呼び水」になって、一人でも多くの参加を呼びかけてください。（渋谷川ルネッサンスなどのNPOが中心となり、国土交通省などが後援している、大江戸「打ち水」大作戦本部に参加した高橋佑司さんからのメッセージです。）

研究者のシミュレーションによれば、百万人が同じ時間に打ち水をすれば灼熱の東京の気温を2度は下げられるとのこと。ふ～ん、おもしろえ。よし本当かどうか、ひとつ試してやろうじゃねえか、と思い立ち、かくも馬鹿馬鹿しくも大いなる社会実験を執行しようということになりました。名付けて大江戸打ち水大作戦！

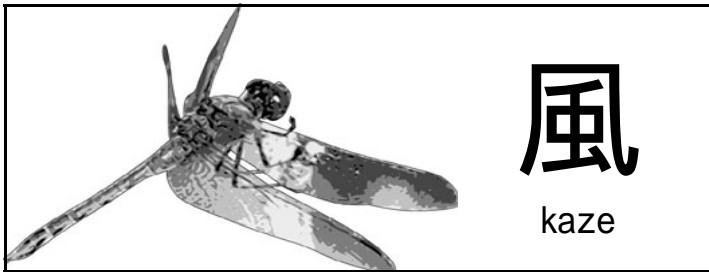
作戦を実行するのは、その日、その時間、東京にいる人。老若男女、誰でもOK。バケツをもって表に出てバシャバシャや



る。バケツがなければ洗面器でもよし。ただ、それだけ。それだけで、確実に気温は下がる！！…のか？？？雨水の会としては、やはり雨を溜めて撒きたいですね。

ヒートアイランド現象が都市の環境問題としてクローズアップされる昨今、大まじめに「打ち水」という江戸の知恵が、その有効な解決策の一つとなりうるかもしれない。江戸開府四百年の今年、世界に冠たる循環型都市だった江戸のエコライフにみんなが思いを馳せるきっかけにもなるでしょう。

環境問題への取組みについて「近隣コミュニティに根ざしたアプローチ」の重要性が、今春日本で開かれた第3回世界水フォーラムの閣僚宣言でも強調されました。東京発のこの試みは、まぎれもなく世界的な発信力をもつことになるでしょう。さらに、みんなでイッセイに水をまく。その行為自体が「一瞬の夏祭り」とでも呼べるような楽しい情景をたくさんつくりだすことでしょう。



天災に雨水の備えを 新会員 加藤光高

4月に入会した横浜市西区の加藤です。広報部会よりご指名で、自己紹介を兼ねて『天災に雨水の備えを』と題して、水害・噴火・地震などの天災への備えに対する問題を書いてみました。

家業の燃料販売業を受け継いで約50年、現在は白灯油とプロパンガスの販売を営業しています。昨年始めに風邪をこじらせて入院し、商売は縮小しましたが、病の原因がつかめたのが幸いで、注意すればもう少し長生きできるでしょう。

さて、ガスの販売で問題になるのが保安です。無毒のガスでも酸欠事故が起きる場合があります。酸素が少ないと、急に意識が無くなり倒れて事故になる事例です。事前の危険を予測した対策の注意と準備が必要です。

スイス政府は『民間防衛』と題した本の中で、このような危険から身を守る方法を大衆に周知していますが、地震国日本は危険に対して無防備で、考えることさえ拒否する傾向があり、事態が起きた時の備えの分からない国です。

雨水の会に入会して、皆様に提案したいのが、雨水を利用した地域の避難壕です。地盤が堤防より低い場所では、雨水集水槽だけを地下にして、避難設備や他

の水槽は地上部に高く組み上げます。避難壕は、強固で大量生産が可能な、コンテナの様な形の規格化した部材を組み合わせて作る予定です。

1階は雑用水の水槽の置場や、階段・出入り口等を左右に配し、空間を駐車場として、津波等の衝撃を避ける構造です。

2階は災害時の避難設備で、大型のものを現地で組んで避難室を作り、耐熱構造は次のようなものを考えています。

①2枚の鋼板の中に水が少し溜まる構造で避難室の周囲を覆い、最上部の外側に排気口のある、周囲が耐熱構造の避難室

②3階の屋上の一部を水槽にして、①の全ての排水管と下部で結び、災害が起きた時に水を水槽に入れて、さらに下に設けたバルブを閉めて、比熱の大きな水の幕で熱を遮る構造であり、屋上に水を足すと熱水が排気口から外に出る構造

この他、3階にはポンプの設備や脱出口や電源のバッテリー等を設けて、通常は雨水を近隣の雑用水に使う設備であり、災害時に配管を切り替えて周りの樹木に散水して地域の安全を守る避難・防火設備です。

「天災は人々を文明社会から原始社会に落とす神の課す試練」として捉え「天は自ら助ける者を助ける」の教えを守って

いくことが重要ではないでしょうか。皆様も雨水の備えで乗り切ることを考えてみませんか？



村瀬事務局長「ラジオ日曜喫茶室」(NHK・FM放送) に出演 6月8日午後1時～3時

喫茶店のお客さんは、私と、日本気象予報士協会会長で「平安の気象予報士紫式部」の著者の石井和子さんでした。石井さんは、私たちの『雨の事典』の愛読者でした。番組のシナリオを見て、2時間の長丁場だなあと感じていましたが、名司会のマスター・はかま満緒さんの舵取りで、雨水利用と下水道料金問題では盛り上がり、天気予報にまつわる話、源氏物語に隠された天気の科学のよもやまばなしなど、話題がつかず、あっという間に終わってしまいました。

源氏物語の雨にまつわる石井さんのお話を伺っていて、先人たちは雨によって豊かな感性を磨いてきたのだ

「ラジオ日曜喫茶室」は、NHK・FM放送の番組。喫茶店にお客さんが入ってきて、マスターがお茶を出しながらお話を聞くスタイルは昔から変わらないそうで、全国にたくさんファンがいて、NHK FM人気番組の一つだとか。



と改めて思いました。

番組の落としどころは、コメンテーターの轡田隆史さんが最後にコメントしたものだ。

「お酒だって雨からできているように、雨が私たちの暮らしの原点なんですね」「私たち日本人は、雨を愛し、雨と共に生きた紫式部の遺伝を引き継いでいるのですね」に集約されていたように思います。

録音テープがあります。聞いてみたい方は事務局までどうぞ。
(村瀬誠)

追記：放送のバックミュージックで、村瀬事務局長はオーストラリアで出会ったホワイトさんのCDを流してもらいました。

「Singing Landcare」というタイトルで、土は汚くない、鳥の目、コンポストメーカー・ミミズ、…そして、雨を受ける生き物たちの歌などがあります。リスナーからこのCDについて反響があったそうです。





雨水利用を進める全国市民の会 総会へのメッセージ

酸性雨調査研究会・事務局長 極上かおる

日頃の皆様の活動に心から敬意を表し、本日の総会の成功をお祝い申し上げます。

私どもの酸性雨調査研究会は、1991年に発足した小さな市民団体です。このたび、雨水資料館の団体登録もさせていただきました。

5月10日には、村瀬様、徳永様にご案内いただき、見学会を行いました。参加者一同深い感動を得ることができました。

私たちは、身近な雨を通じて、環境問題を考えるこ

とを基本にすえ、手足を使って調べ、出た結果をもとに環境負荷の少ない生活を考えていくことをモットーにしております。貴会とは、内容的にも切っても切れない関係にあると考えます。この夏休みには東部地域（隅田川以東6区）を中心に子どもたちの環境調査なども呼びかけていきたいと企画中です。決まりましたら、お声かけさせていただきます。

大気汚染をなくし、きれいな雨をめざしてともにがんばりましょう。

「MONSOON 水と生きるアジア」市原基 写真展を見て



5月17日(土)は、蒸し暑い日でした。新宿のコニカプラザギャラリーで開催された市原基氏の写真展とトークショーに行きました。1週間前には、『雨の事典』の推薦文を寄せていただいた加藤登紀子さんがトークショーに出演されたとか。

市原氏は、三脚を立てなくても6畳くらいに引き伸ばす写真を撮ることができるという、プロカメラマンです。オートフォーカスもデジカメも必要ないと言い切ります。「おいしいものを食べ、海を見て、写真を撮った。」目線を落とし、胃袋でものを考える、

毎日生きていることを考える、人でもあります。

「モンスーンはモンスターだ。アジアの水、湿度を撮ったが、尻尾を触った程度になった。」とアジアモンスーンを12年間かけて撮った市原氏は語りました。モンスーンの由来はマウシム(=季節風)というアラビア語です。モンスーンアジアは、パキスタンから日本までの地域を指し、世界の人口の半分以上が住む地域です。

特に印象深かった写真は、エベレストの山頂を撮ったものでした。2億年前ゴンドワナ大陸が分割しインド大陸の部分が移動して、1千万年前ユーラシア大陸とぶつ

かり、エベレストになったそうです。そのエベレストを体感して写真にしたいと思い、実際に登って撮ったものの。写真を撮る執念はすごい。

夕日に映え、黄金色に輝くメコン川の航空写真にも圧倒されました。暴れ龍・メコンは時の権力者でも思い通りにならなかった、強大な自然の力を感じます。メコン川が洪水時につくって残していった三日月湖は、メコンの卵です。そのエピソードにも驚きました。ラオスの空軍機をチャーターし、2ショットのみ、命がけで撮ったそうです。

また、自然に寄り添うように生きる人々を撮った写真もありました。激しい雨に濡れながら重い荷車を曳く労働者ときらびやかな衣装に身を包んでゆっくり歩く女性の明暗の対比が印象的でした。

最後に写真展で掲示されていた市原氏のメッセージを紹介します。

…モンスーンのもたらす雨は、アジアの風土と生命の全てを育んできた。まさにこの地域になくしてはならない子宮のような「母なる風」である。…アジアにはもともと原始宗教ともいえる自然崇拝が根付いていると思われる。なかでも生命の維持に必要な不可欠な「水」はその中心をなしていたはずだ。アジアの人々も水も一見従順に見えるが、…生きる術と大自然の融和点を見つけ出したたかにしなやかに生きてきたのがアジアの人々であり水である。アジアの元気が地球の元気だ。

(高橋朝子)

奥深い変(形菌)ないきもの (公開セミナー第1回報告)

6月22日は梅雨の合間でした。変形菌の絶好な観察日でした。日本変形菌研究会が主催した高尾山での観察会に便乗して、7名が参加しました。アメーバーのように動き回っていたかと思うと、「接合」といってどンドン細胞を取り込み、1つの細胞で核が何億個にもなります。適度な水とエサがあるところでは、多くの種類が観察されました。名前がなんとかホコリとつきます。子実体を触ると細かい変形菌の実がぼわんとホコリのように舞います。参加者の柴さんが見つけた変形菌が、新種かしら?。役員の先生が鑑定すると持って行ってしまいました。



東本願寺御影堂の屋根裏で明治時代の建設の様子を説明する僧侶の蓮容さん。明治の巨木の森がここにありました。

編集後記：事務局は、会の名前が変更になって少しほっとしているそうです。電話で名乗るとき、舌がまわらないで言い損なうのではと緊張していたとか。